

令和2年5月18日
(色染昭35年卒) 山田 英二

“宗教と経済”

§ 1. まえがき：

「日本の美と宗教」と題する拙文に対して、或る友人から「宗教」と「経済」は関係が深いのではないかとのご指摘を受けた。戒律の厳しいイスラムやカトリックの国々で経済が停滞するのは、人々は宗教中心の生活を送り、経済的な事に関心が薄いからではないか？或いは、イスラムのラマダンの断食日等、五行・六信や、カトリックの日曜日の完全休息を真面目に実行すれば、会社勤めは出来なくなるのではないかと言う見方がある。

そこで「宗教」と「経済」との関係について調査した。その結果、中沢新一氏が「宗教の未来」と題する講演録の中で、この問題について詳しく論述している事がわかったので、§ 2. 以降に一部文章を修正しながら抄録的に備忘録として要約した。

また、週刊エコノミストが2012-9-4号に於いて「宗教と経済」の特集号を発行したので、関連文献として、この雑誌の記事を下記『 』に引用した。

『欧州において経済危機が深刻化している国々は、スペイン、ポルトガル、イタリアであり、どれも著しくカトリック的色彩を帯びている。ギリシャの場合はカトリックではなくギリシャ正教会だが、正教会のあり方はカトリックにかなり近い。

一方、ドイツ、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドは、プロテスタントが強い勢力を誇っている。

カトリックでは教会に絶大な力が与えられ、信者を救済する役割を担っている。その頂点にあるローマ法王は、地上に於けるイエス・キリストの代理人とされ、その決定に一切誤りはないとされている。キリスト教世界に於ける労働観は、人間が労働しなければならないのは、原罪を犯した結果であり、労働が「苦役」としての性格を持っており、その考え方は今でもカトリックの国々に受け継がれている。

一方、プロテスタントでは、宗教改革を行ったルターが教会批判を展開した事に示されている様に、教会が信者の救済を司っている事を否定し、法王の権威も認めていない。信仰は全て聖書に基づくべきとされていて、個人の信仰のあり方が最も重視されている。

ルターが宗教改革でプロテスタントを生んだ意義は、カトリックの労働観を脱し、「天職」即ち、労働は「神から与えられた使命」と言う考え方で勤労意欲を高め、儲けた金は資本として蓄積し、新たな事業に投資する「資本主義の精神」が生まれた点にある。』

§ 2. 2001. 9.11 以降の世界（何故イスラム教とキリスト教は対立するか）：

9.11 (NY 同時多発テロ事件) 以降イスラム教と、キリスト教の対立が露骨に表面化した。マルクスは、宗教はアヘンの様なものであるとして軽蔑したが、宗教は益々政治・経済に深くかかわっている。

イスラム側から見ると、資本主義的なシステムは敵とみなされるが、その理由は、資本主義の根本的な原理を支えているのは、キリスト教であると理解しているからである。

キリスト教の背景にある資本主義は不均衡な富の分配を行い、富の偏在化をもたらし、イスラムは貧しい人々の側に立っていると言う主張を持つが故にイスラム教とキリスト教は対立する。

§ 3. 宗教と経済の深い関係：

宗教と経済は深い関わりがあるどころか、この二つは同じものの現象の二つの顔なのではないか。経済は宗教の一側面、一表現形態であり、宗教は経済現象の一つの表現形態であると言えるのではないか。両者は数学で言う同型 (Homology) に相当する側面を持っている。

(参考：マカオは長年ポルトガルの植民地であったが、マカオを拠点としたポルトガルの商人は日本・石見銀山の銀の貿易で巨万の富を築き、その富をポルトガルから還流してマカオに立派な教会と街を建設した。これらマカオの街並みは世界遺産に登録されている。即ち、マカオの貿易・経済活動とキリスト教活動は一心同体であった)

§ 4. マックス・ウエーバーの研究 (プロテスタンティズムは資本主義の発展に寄与)：

社会学者マックス・ウエーバーは近代資本主義とプロテスタンティズムとの関係を論じ、オランダ、イギリス、アメリカ etc のカルビニズム (プロテスタントの思想) の影響の強い国では、資本主義が発達したが、イタリア、スペイン etc のカトリック国は資本主義が立ち後れた。その原因は、禁欲的労働に励む事によって社会に貢献し、この世に神の栄光をあらわす事によって自分が救われると言うプロテスタントの考えは、資本主義の精神に適合していたと述べている。即ち、禁欲的労働によって蓄えられた金は、禁欲であるが故に浪費される事もなく、再び営利追求の為に投資される事になる。この様にして、プロテスタンティズムの信仰が資本主義の発展に寄与したと述べている。ウエーバーは、プロテスタントの世俗内禁欲が資本主義の精神に適合性を持っていたという逆説的な論理を展開し近代資本主義の成立を論じた。但し、近代化が進むにつれて信仰が薄れて営利追求自体が自己目的化するようになったと考えられる。

§ 5. 贈与型経済と、等価交換型経済 (ロシア革命は経済面で失敗)：

人類は交換型経済の始まる前 3 万年くらいの間は贈与型経済であった。贈与型経済では「もの」+「何か (霊)」が人と人の間を動く。キリスト圏では、God=Gift であって、この世界は神によって与えられている。神は我々に見返りを求めないで贈与すると考えられている。神に対しては贈与物のお返しをしない。一方、世俗世界では法 (等価交換の原理) に従ってお返しをする。聖なる神の世界と、世俗的法の世界の対立関係は、経済の中で起きている対立関係とホモロジーを示している。

ロシア革命とソ連の崩壊という歴史は、宗教と経済がホモロジーの対応を示している事を証明している。

ロシア革命 (1917) はドストエフスキー (1821~1881) 的思考方法、即ち、高次元で対称性の論理に従って動いていく経済体制でなければならなかった。それは贈与型資本主義とも言うべきか、20 世紀最大の幻想とも言うべきもので、結局のところ、国家が管理する

資本主義の域を出なかった。合理的資本主義社会では人間を幸福にすることは無く、疎外されていくと考えた。我々の資本主義社会は分離を原理とし、分離した上で貨幣を媒介してつなぎ合わせると言う仕組みで成り立っている。対称性論理で動く贈与型と、非対称性論理で動く交換型、この二つは経済現象の中で大きな対立をする。

(参考：ドストエフスキーの著作は、当時の社会主義 {理性万能主義} 思想に影響を受けた知識階層の暴力的革命を否定し、キリスト教に基づく魂の救済を訴えている)

§ 6. イスラムの世界 (政教一体) :

イスラム教は、仏教やキリスト教と並ぶ世界三大宗教の一つである。中近東をはじめアジア諸国で信奉され、信徒数は6~7億と言われる。宗教史的にはイスラム教はユダヤ教やキリスト教と並ぶ一神教の伝統に属し、中でも一番若い宗教で、共通する要素も多く、この三つの宗教 (イスラム、ユダヤ、キリスト) は屢々「姉妹宗教」と呼ばれる。何を宗教的に中心的出来事とみるか、何を神の決定的な自己啓示とみるかによって、それぞれの歴史観の間に大きな違いが出てくる。

キリスト教はイエスを神の子・キリストとみ、その死をアダムと共に人類に入り来たった罪の贖いとし、その様な神の業を受け入れる事による人間の救済を説いた。これに対してイスラム教は、ムハンマドを最後の予言者と認め、彼に下された啓示を真実とする。そこでは神はコーランと言う言葉の中に決定的に自己を表したのである。

日本は政教分離が採用されているが、イスラムは政治・経済、全てがコーランに基づく「イスラム法」に合っているか否かが重要で、これをチェックするイスラム法学者が存在する。投機、酒、賭博への投資を禁止、不労所得に該当する所得の利息、利子は存在しない。財産を退蔵する事は卑しい、利息付きの預金は認めない、直接投資はOKで富の循環を促進する効果があると考えられる。

東側 (正教、イスラム) →イエスは人の子であると考えた人がイスラム教に入った。→アリストテレス型の論理を否定する。→ 宗教と科学が対立。→贈与型の論理が支配。→利子を取ってはならない。→資本主義は発達せず、農業を基盤とした共同体を維持。

イスラム教はユダヤ教の厳格な一神教の考え方を更に純化し、アッラーという超越神だけが存在する。イスラムの律法は教典からなり、教典にはコーランとハディースがある。コーランがモハメッドに伝えられた「神の言葉そのもの」即ち神の啓示が臨んだもので、人間が書いたものではないと受けとめられているのに対して、ハディースはモハメッド他の指導と言行録とされており、膨大なボリュームによって成る。

イスラムは偶像崇拝を厳禁する。信徒には姿を描く事も許されぬ予言者モハメッドを、好色、残忍な人物に描いた米映画に中東初め各地のイスラム教徒の抗議が広がっている。

イスラム教はスンニ派とシーア派に二分、大別される。

☆スンニ派はコーランとハディースの両方を絶対視する。

☆シーア派はコーランのみを絶対視する。

イスラムは、世界宣教に際して教義的にも、政治的にもイスラム化しようとしており、政治と法律で縛りながらイスラム原理主義になるよう宣教していく。故に、イスラム世界で

は、イスラム原理が日の目を見るまで身を低くせよ（タキーヨ：自己抑制）、との思いでイスラム化がなされるが、彼らが少数派の下では何も見えてこない。

イスラムには律法が五つある → その一つが「神」について。

他の四つは、①礼拝を5回／日、 ②断食を1ヶ月／年、 ③喜捨(施し)収入の2%を1回／年、④メッカ詣で（ハッジ）を最低1回／生涯

イスラム教徒がキリスト教徒と反する著しい違いの一つが、「神」についての信仰である。キリスト教が『三位一体』の「神」を説くのに対して、イスラム教は“神は唯一で、三つの神ではない！”と。イスラムの信仰上の躓きを生じさせるほどのリスクを回避するならば、次のような言葉を用いて対話が続けるように心掛けるべきで、数(三位一体)の概念に言及するべきではない。 即ち、“神は唯一である。唯一の神の中に言葉と霊がある”と。

更に、アブラハムを起点にすると、キリスト教とイスラム教の対話が生まれる、或いは接点を見いだせるのではないかとの仮説が成り立つ。

アブラハムが2人の子供に別の宗教を教え込んだ筈がないとの思いからである。

イスラムにとって、自ら信じる『唯一の神』に矛盾する、或いは批判を加える者を「不信心者」と称し、それらは殺されても良いものだと思える。殺しても罪に問われず、立派なことをしたとなる。「イスラムは怖い！テロリズム、暴力行為」との偏見、過激的イメージがあるが、イスラムは本来、穏やかな人々で、神を求める人々である。

(この項：ヨセフ・ロニー牧師の講演録より)

§ 7. グローバリズムの基本原理はキリスト教：

西側（カソリックとプロテスタント）→三位一体説（神と神の子と霊）、神の子は神であると同時に人である。ニケイヤ宗教会議に於いて「父と子は共に霊を発する」と言った。即ち、父と子が同格になった。→石炭からエネルギーが放出される、太陽から熱が放出される。→ 合理的な論理を保存したまま神の本質を考える事が可能になった。→商品経済を許す論理が生まれた。→ 利子を取っても良い。増殖 OK。→ 資本主義が可能とした歴史的プロセスを考えると宗教の思考方法が大きく影響している。

西ヨーロッパ型のキリスト教（カソリック、プロテスタント）の世界で形成された資本主義の形が、我々の経済システムのみならず、思考方法、生活様式、政治形態 etc 全てに大きな影響を与えている。つまりグローバリズムの基本原理になっている。グローバリズムとは、キリスト教の構造を経済原理の中に拡大・拡張したものであると言い替える事が出来る。

§ 8. 日本人の2つの信仰形態（神と仏）：

日本でキリスト教の宣教に失敗したのは、日本人は一神教を受け入れない国民性を持っているからである（韓国では宣教に成功している）。しかし、西ヨーロッパ型キリスト教が作り上げた資本主義はスムーズに受け入れた。日本人の歴史的に形成された信仰形態は、鎮守の森を中心とする神様（国家が出来てから）と、来訪神とも言う精霊（国家が無い古い時代からある）を同居させていく。この二つの時代の信仰が合体して一つの宗教の形態を作っている。

古くから日本の神様は姿形のない精霊の様なものであった。自然界にあふれていると考えるアニミズムが日本人の心の根っこにある。そこへ大陸から6世紀に仏教がやってきた。奈良時代・聖武天皇に熱烈に信仰されて一気に仏教の地位が高くなった。各地に国分寺という国営のお寺を造ったり、お坊さんを大事にした。神社系の神様 → 共同体の神様。仏教→日本人の外来思想として受け入れたのではなく、元々あった思考方法の表現方法として受け入れたのではないか（折口信夫）。即ち、我々の中に存在していたこの思考方法を受け入れる器として仏教を受け入れた。仏教はあの世とこの世をつなぐ葬式仏教である。

日本人の超越的な思考は、神道と仏教の結合性として成り立っていた。明治期に国策で分離したのが問題（それまでの神仏習合の考え方を捨てて国が認めるのは神道だけにした）。

日本人は無宗教（→無神論者）の様に見えても無信仰ではない。山の神、海の神、森の神など、八百万の森羅万物に神を感じ、自然に畏敬の念を持ち、祖先に感謝礼拝し、他の神々を受容する、これが日本人の信仰形態であって、信仰心が無いとは言えない。

大半の日本人は、これまで近代化の名のもとに日本の後進性や前近代的な要素として宗教を切り捨て、あたかも宗教が存在しないかの如くに振舞ってきた様に思われる。しかしながら、日本の経済的発展を担ってきた企業が神々を祀っている事実からも明らかな様に、宗教が現代社会の隅々まで溶け込んでいる事を意味している。現代社会は、絶えず宗教を不可欠な要素として内包し存立しているというのが現実である。我々はもっと素直に宗教に関与すべきである。宗教は日本の現状と未来、日本の社会構造を理解する上で重要な鍵になるであろう。

一方、西部すすむは、「思想の英雄たち」の中で、立法、司法、行政の三権につぐ第四の権力はマスコミであって、世論形成に実力を発揮するマスコミこそ、「神の摂理」が欠落した「衆愚政治・デモクラシー」という諸悪の根源をなしていると言う。「多数者の専制」と「唯一者の独裁」とは本質的に異なるものではなく、今世紀のデモクラシーは独裁政治と衆愚政治に両極分解しているとさえ主張する。

日本の場合、ただでさえ乏しい宗教感覚が、貨幣と技術の繁殖のために窒息寸前にさせられている戦後日本に於いて、アレクシス・ド・トックヴィルのデモクラシー論は、我らの戦後民主主義なるものの空しさを撃たずにいないと述べて、経験の真髓が歴史の中に少しずつ堆積して出来上がった伝統や宗教の重要性を述べている。 以上

【引用文献】

中沢新一著「宗教の未来」（講演録）

橋爪大三郎他著・週刊エコノミスト特集号「宗教と経済」

西部すすむ著「思想の英雄たち」

阿部美哉著「世界の宗教」放送大学教育振興会

上田閑昭・柳川啓一編「宗教学のすすめ」筑摩書房